

エコライフ実践者からのメッセージを教材化する

—— グローバルな視野の育成とともに身近な生活からのエコ活動を ——

東京都立目黒高等学校 坂口克彦
株泉放送制作・青山学院大学大学院 浅野麻由

序. 新しい視点を持った環境教育を

筆者らは、「新しい視点からのボランティア教育の実践をーボランティア活動の問題点を教育現場から考えるー」と題した研究論文を昨年の本紀要¹⁾に投稿し、同タイトルでの例会発表²⁾をおこなった。我々はここ1年半近く、幾つかの教材化プロジェクトを組んできており、今回は前回報告とは異なった分野での教材化とその実践を紹介したい。

今回取りあげるのは、主として「環境教育」の新しい方向性の提案である。

前回の「ボランティア教育」について、筆者らはボランティアの意義を語り参加させることを目指すという従来型の教育にとどまらず、ボランティアの裏側にある問題点を指摘するという新しい視点を与えることを提案したが、今回も「環境教育」に新たな視点を与えることを目指したいと考える。

1. 問題の所在ー今までの環境教育は果たして成功してきたのかー

地球規模的な環境問題が叫ばれる現在、テレビや新聞、雑誌や広告などでよく見かける「環境」という文字。砂漠化、地球温暖化、地盤沈下、酸性雨、水質汚濁、大気汚染、オゾン層破壊などの地球環境問題は深刻さを増す一方である。その中で、日本においても環境教育が学校教育だけでなく、企業などでも導入された。もちろん筆者らも、高等学校社会科・地理歴史科・公民科教育の中で「環境教育」を取りあげ、本紀要でも数回にわたって、その実践を報告してきた。^{3) 4)}

しかし、日本は未だに環境後進国であると言われる事態には変わりがなく、心理的にも人々の「環境問題」に対する関心が、海外の人々に比べて薄いと言われる。つまり国家レベルでの学習指導要領でスローガン化することや企業レベルでの取り組みも重要だが、個々人の意識向上をするための生活レベルでの取り組みこそが重要となってくるのだと筆者らは考える。よって、環境保全実践活動における教育プログラムの欠如を補うための『人』に着眼した生活レベルでの環境教育、これが筆者らのたどりついた、第1の新しい視点である。

もう1点、筆者らが注目したのが、環境問題が地球全体に与える影響については、新課程教科書でも取りあげられており、現実にも一般的に講義されていると考えられるが、それが抽象論になってしまい、そこに悪影響で苦しむ「人」の姿が見えにくいという点である。⁵⁾ 例えば、地球温暖化。両極圏の氷が融解して水位上昇をすれば、確かに全世界の海に面する国が被害を受ける。日本も例外でない。だが、国土面積比率として大きな被害を受けるのは大洋上の低平な珊瑚礁島であるツバルやモルディヴ、或いは海に面していないにもかかわらず温暖化によって山岳氷河融解被害を受けるヒマラヤ山系の中に位置するネパールなどの発展途上諸国である。特に温暖化は先進国の化石燃料消費を主因とするので、日本のような先進国が被害を受けるのは致し方のない部分がある。にもかかわらず、原因を出してこなかった発展途上国までもが被害を大きく受けるという現実に気づかせるという教育を、我々高校教育に携わる者はしてこなかったのではないか。

途上国をめぐる教育として、我々は「開発教育」という形で南北問題・南南問題などの教材化を進めてきたが、それだけで独立したものとして扱ってきた。それを「開発教育と環境教育の融合」という形も試みてみようというのが、筆者らの提案する第2の新しい視点である。

2. 「人」に着眼したグローバルな環境教育を

前章で論じた「新しい2つの視点」を含めた環境教育プログラムを以下に提案する。

● 提案 ●

1. 生活レベルからのエコ活動 → 実践者からのメッセージを教材化

実践者の暮らしぶりや環境問題の概念など実感をもたせるため、映像を用いる。

2. 『人』に着眼したグローバルな視野の育成

普段の生活では見えない、世界各地の人々はどのような「環境問題」に直面し、どのような「エコライフ」を送っているのだろうか。

第1には、エネルギー消費量が高い先進国における普段の生活を振り返らせることが必要である。冷暖房・エレベーター完備、ありあまるモノ。大量消費時代、使い捨て社会は終わったというが果たしてそうであるかを生徒自身に再認識させることが、生活レベルからの環境教育の第一歩である。そして本プログラムでは、先進国において「エコライフ（環境にやさしい生き方）」を実践している「人」に着目し、その生き方を紹介したい。

第2には、開発教育と環境教育の融合をはかる。先進国における我々の豊かな生活の裏側では、エネルギー大量消費とは無縁の自然の恵みを生かした生活を送る人々や、社会的

立場の低い人から順に「環境問題」に直面していることに気づかせたい。単なる知識としての現状把握だけでなく、そこに生活して、実際に被害にあっている「人」に着目することで、身近さや危機感を実感させることがねらいである。豊かな生活を手に入れている先進国側が地球を汚してしまった責任と、途上国での被害。このことは、例年のように出される「なぜ先進国は途上国に対し、経済援助をしなくてはならないのか？」という生徒からの素朴な質問にこたえるものにもなる。

さらに、従来の開発教育においては、国際協力は途上国の現地で行うボランティアや資金協力だという固定概念がつくられてしまいがちであったが、先進国の中においての環境対策の行動も途上国の「人」を助けることに繋がるのだという新しい視点を見開かせることにもなる。

3. エコライフ実践者のメッセージを生徒たちに伝える—映像だからこそ伝わる熱意—

我々の身近な生活の中でできる環境対策こそが、環境先進国に加わるためにも是非とも必要となってくる。そこで、筆者らが制作に関わっている番組を紹介したい。インターネット動画配信を行っている Bibisage 「f-mail」という番組である。本番組は、「地球の環境にちょっといい暮らし」をテーマとしており、この番組では1回に1名のエコライフ実践者を取りあげ、

- ①エコライフ実践者の暮らしぶり
- ②モノの考え方
- ③「エコロジー」をもとにした人生観

などを紹介する3分間のビデオエッセイである。⁶⁾ここで敢えて映像の利用にこだわるのは、その「人」の生き方、心情、熱意などをストレートに伝えやすいからである。本プログラムで紹介するのは、以下の4名である。

●アリスン・デバイン氏

・環境先進国イギリスでの地球にやさしい日常生活を紹介する。

イギリスでは、コンビニやスーパーではビニール袋も付いてこないし、電気を一人の為にだけ使うこともあまりしない。全ての生活に節約を自然と取り入れている。その他にも洗濯物は週に一回まとめてやる、冷蔵庫の中身はドアに貼っておき毎回開けなくてすむようにする、古い洋服でもリメイクすれば何十年も着られるなどの生活上の工夫を日頃から実践している。

日本人は物欲に囚われすぎではないか？「流行」があって、その度に新しいモノを購入していく。「人生はモノより思い出」という節約生活が身につけているイギリス人の

価値観を日本人にも提案したいと語る。

●澤田千江氏

- ・廃食油をリサイクルして手作り石鹸をつくる。

手作り石鹸の良さは、①身近に必要な物ができてしまう喜び、②自分のオリジナルの石鹸ができる、③自分が納得いった材料で作れること。そして④無添加石鹸だから人と環境に優しく自然への負担は軽くすむ。石鹸は身近に常に使うものだから、お金をかけないリサイクル石鹸を念頭に置いたもの。購入した新しい油は、まず料理に利用し、そして石鹸作りをするのがおすすめと語る。

●金丸正江氏

- ・都会生活から抜け出して炭師になり、環境保全活動をおこなう。

炭は太古から人間が関わってきたもので、昔は全国の間々で炭焼きの煙が出ていた。炭を焼くことで、多様で豊かな生態系が維持されていた。炭は、森林のリサイクル。炭は単に燃料としてだけでなく、多目的に利用ができ、室内の空気・水質の浄化・防腐・消臭・土地の改良剤などと使い道は多い。炭を燃やさずに使うことは二酸化炭素（CO₂）を固定化することで地球温暖化防止にもなる。従って木や山を守り、川や海を守る。ひいては地球を守る大切な役割を果たしているのだと語る。

●矢谷左知子氏

- ・雑草を布糸にし、自然の美を訴えるアーティスト。

両親が都会から伊豆に引っ越したことから、草木の美しさに惹かれて、草を織り込んだ布を「遊びで」織り始めた。周囲に自生する草にこだわり、夏の間にはそれらを採取し、土の中で発酵させたり表皮をこそぎ落としたりして一年分の草の糸を作る。秋には染料となる木の実拾いをしたり、冬には山かや等の採集など、一年を通して身の回りの草木と関わり、季節のサイクルの中での布づくりを続けている。素材採取で大切なことは沢山生えているものを使うということ。希少なものを採ってしまっただけでは自然素材を使う意味がなくなる。自然のエネルギーとつながりを持ち続けることが環境汚染へのささやかな抵抗だと語る。

本番組を通して、生活に根付いた環境対策の紹介をおこない、エコロジーに結びつけられるような多角的な視野の育成を目指したい。

4. エコライフの実践まで目指す環境教育—知識段階から実践段階へ—

ここでは、公民科現代社会または地理歴史科地理Bにおける展開として、大単元 12 時

間配当分の指導案を示す。

地理歴史科地理B・公民科現代社会学習への指導案

大単元：『環境・エネルギー問題の地域性とその改善策』 配当時間 12時間

時数	小単元名	主な学習内容・活動	教師の支援・留意点	他教科・総合学習等との関連
2	こんなに使われているエネルギー資源	<ul style="list-style-type: none"> ○1年間に世界各国が消費しているエネルギーの量 ○このままでは危ない！—地球の資源の限界— ○多発する地球環境問題—地球温暖化、酸性雨、砂漠化、土壌侵食、水質汚濁、大気汚染、熱帯林破壊などの実態紹介— 	<ul style="list-style-type: none"> ○データを与えて、エネルギー消費国順位などを作表させる ○危機感を持たせるため、写真や映像を利用 	○理科と連携し、校内で酸性雨pH測定を
2	先進国の豊かな生活の裏側には	<ul style="list-style-type: none"> ○先進国での冷暖房、エレベーター完備などの豊かな生活とエネルギー消費—身の回りの便利さ・快適性を実感する— ○温暖化の影響での融雪洪水被害や海面上昇による水没の危機など、経済的恩恵を受けていない途上国の人々に被害が出る事例の紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ○戦前の暮らしと今の暮らしを比較する ○ネパール、ツバルなどを事例に取り上げる 	○国語科と連携し、戦前の暮らしぶりを描き出している文学作品を利用

時数	小単元名	主な学習内容・活動	教師の支援・留意点	他教科・総合学習等との関連
2	エネルギー問題解決のための世界的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ○世界レベルでの取り組み・気候変動枠組み条約と地球温暖化京都会議 ○国家レベルでの取り組み・環境税(炭素税)、排出権取引 ○企業レベルでの取り組み・エコカー開発、ISO国際環境規格取得など 	<ul style="list-style-type: none"> ○先進国と途上国の主張を対比する… 97年京都会議当時の新聞記事を利用 ○各メーカーのパンフレットや広告等を利用 	○環境問題と経済の関係も考察させる
	私たちの身近でも	<ul style="list-style-type: none"> ○生活レベルでの取り組み・環境先進国における取り組み—省エネ・環境 	○デバイン著『イギリス節約	○理科と連携し、実際に廃

2	できる省エネ・環境対策	対策を日常生活に取り入れたイギリスの事例― ・日本での取り組み―廃食油を利用した石鹸づくりを試みた事例―	生活』を用いて紹介する ○春江工房インターネットホームページを利用	食油から石鹸を製造する体験をさせるのもよい
2	これからの省エネ・環境対策の方向性	○今、注目を浴びる省エネ・環境対策の試み―炭焼きが環境保全に役立つ?!― ・燃料としての見直し、浄化消臭機能、山林を利用することによる森林活性化と保全機能などの紹介	○金丸正江著『炭に生き炭に生かされて』を用いて紹介する	○理科と連携し、炭に適する樹木の種類、成長速度、生育条件も考察する
2	エネルギーを守っていくために	○今日から始めよう、省エネルギー！ ・前時に紹介した金丸氏の言葉「環境対策は別にすごいことではない。誰にでもできるものなのだ。」 ○グループワーク①「エネルギー浪費チェック」 ・家庭内だけでなく、学校内、駅や街頭でのエネルギー消費の無駄がないか、グループに分かれて実際に教室を出て数十分間の調査、その後討議、発表 ○グループワーク②「私たちにできる省エネ・環境対策の提案」 ・グループの中で自分たちにできることの検討、発表	○学校の事情に応じ、駅調査チーム・商店街調査チーム、校内調査チームなどと分けても良いし、校内だけにして1階～3階チームなどと分けるのも良い	○リサイクル活動を実施している学校ではホームルームや生徒会や委員会活動との連携をとれる場合も

前章に論じた、映像を使った「人」に着目する実践は、第 3-4 時および 7-10 時に相当する。第 1-2 時まで含めて、映像によって生徒の意識を高めることが必要であり、第 3-4 時の途上国における被害地域の「人」の姿の紹介も生き生きと示し、危機感を具体的なイメージとしてとらえさせる工夫をすることが大切である。⁷⁾

この指導案は「総合的学習の時間」においても導入可能な素材である。その場合には、他教科との関連づけによってティームティーチングも実施できる。よって、指導案の右端の欄では、他教科或いはホームルーム・特別活動との連携の可能性も示した。

むすび

本稿は、筑波大学社会科学教育学会第22回大会で口頭発表したものである。当日に質問、意見を賜った方々に謹んで御礼申し上げる。また、今回の紀要掲載にあたってご配慮頂いた都倫研の村野光則、廣末修先生にも感謝申し上げたい。

【注】

- 1) 浅野麻由・坂口克彦「新しい視点からのボランティア教育の実践をーボランティア活動の問題点を教育現場から考えるー」、都倫研紀要第40集、2002年、pp.42-48.
- 2) 平成14(2002)年10月22日、都倫研平成14年度第1回研究例会.
- 3) 坂口克彦「新教育課程における『現代社会』の教材化の工夫ー生徒自身の自覚と行動を促す『環境学習』の試みー」、都倫研紀要第34集、1996年、pp.53-56. の中では、「校内ゴミ箱分別コンテスト」など、遊び心を持たせつつ自分自身の行動を省みて、その後の実践行動につなげようとの提案をおこなった。
- 4) 坂口克彦「資料収集・解析・総括と意見表明能力の養成を目指す『懸賞公募論文』指導の実践」、都倫研紀要第39集、2001年、pp.57-62. の中では、省エネルギー・環境問題をテーマとする懸賞公募論文に応募させる実践を紹介した。
- 5) 北村洋基ほか『現代社会ー21世紀を生きるー』（高等学校公民科文部科学省検定済教科書）、数研出版、2003年、pp.6-13. などでも、温暖化に伴う水位上昇被害を大きく取りあげているが、世界全体と日本の問題としての取扱いとなっている。
- 6) インターネット配信番組サービス「ビビサーージュ」<http://www.bibisage.com>
- 7) 一例として、西日本新聞ホームページで特集している「地球紀行 極地からの警鐘」<http://www.nishinippon.co.jp/news/World/TravelPiece/maldive/index.html>（西日本新聞 2002年9月3、17日、10月3、22日付朝刊所収）などが挙げられる。

【参考文献等】

アリスン・デバイン『イギリス節約生活』、光文社カップ・ブックス、2002年。
金丸正江『炭に生き炭に生かされて』、創森社、1999年。
春江工房インターネットホームページ www10.u-page.so-net.ne.jp/ka2/sawada-y